



THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会
宣教110~120周年
標語

共に生きる
いのちの天幕を
広げよう

発行所 **福音新聞社** (1部100円)
〒169-0051東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3202-5398 info@kccj.jp
発行人/ 梁榮友・編集人/ 鄭守煥
印刷所 青丘文化社

伝道主日
説教

まず、愛しましょう

＜ヨハネによる福音書13：31～35＞



林明基 牧師（福岡教会）

1. はじめに

一般的にギリシア語で時間を表す言葉は二つあります。それは「クロノス」と「カイロス」です。クロノスは一般的な時間を意味します。自然に日が暮れて流れる時間、人が生まれて老い、病み、死ぬ時間です。私たちがよく言う「時間」がこのクロノスです。

カイロスはチャンス、機会を意味します。意識的で主観的な時間、瞬間の選択が人生を左右するそのようなチャンス、機会、決断の時を意味します。私たちがよく言う「時」がこのカイロスです。

日常的に流れる時間がクロノスであり、それが特別な意味を持つ瞬間、その時間はカイロスになります。例えば、イエスさまが誕生した聖誕節やイエスさまが復活した復活節は一般的な時間でしたが、その時間に特別な意味が与えられたら、その時間はクロノス（使徒7：17）からカイロス（使徒7：20、エフェソ5：16）に変わるのです。もちろん、聖書もこの二つのギリシア語を使っています（使徒7：17, 20, エフェソ5：16）。

2. 新しい掟

しかし、ヨハネによる福音書13章1節を見ると、イエスさまがこの世を離れて父のもとへ戻る時のことを記録していますが、客観的な時間を意味する「クロノス」でもなく、主観的な時間を意味する「カイロス」でもない「ホラ」という言葉が使われています。この「ホラ」という言葉は、種まきの時や結婚適齢期など最適な時間を表すときに使われる言葉だそうです。その意味は、過越祭の前にイエスさまがこの世を離れて父のもとへ帰る時を定められたのは父なる神さまであり、イエスさまはそれを知り、従ったのである。イエスさまに対抗した人々がイエスさまの十字架の死の時期を決めたのではないという思いを表しているのではないかと。

終わりの時、イエスさまは愛する弟子たちと別れる前、食事を共にし、その場で弟子たちの足を洗われました。ユダの裏切りを予告し、愛について教え、ペトロの離反を予告されました。このすべてが弟子たちを最後まで愛されたイエスさまの姿でありました。イエスさまは、ご自分を裏切ることを知りながらユダの足を洗い、ご自分を否定することを知りながら、ペトロの足を洗われました。この愛はイエスさまの告別説教（ヨハネ14章）につながっています。最後はイエスさまを3回も否定し、落ち込んでいるペトロに「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」（21：16）と彼の信仰を回復させて最後までその愛を示されました。

そのイエスさまは弟子たちに新しい掟を与えられました。それが、今日の本文である「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。」（13：34～35）であります。イエスさまは弟子たちに「弟子の道」をこの御言葉をもって教えられました。しかし、新しい掟と言われたこの御言葉は、旧約聖書のレビ記（19：18）にある御言葉です。それなのになぜイエスさまは新しい掟と言われたのでしょうか。イエスさまは、この「新しい」という意味を新旧の意味での新しいを言われたのではありません。すなわち、イエスさまが旧約の御言葉を廃止し、新しい掟を立てようとしたのではなく、本来の意味において成し遂げられなかったこの御言葉が成し遂げられることを願って言われたのです。

そしてレビ記の御言葉は、その愛の仕方を「自分自身を愛するように」としています。マタイ（22：39）、マルコ（12：31）、ルカによる福音書（10：27）の三つの共観福音書もレビ記の御言葉のように「自分自身を愛するように」としています。しかし、ヨハネによる福音書は、イエスさまが「わたしがあなたがたを愛したように」と教えられたと記録している。すなわち、その愛の仕方が違うのです。ヨハネによる福音書は、制限的で加飾的な私たちの愛ではなく、無制限で犠牲的なイエスさま、最後まで弟子たちを愛されたイエスさま、その方が示されたその愛の模範を見て学び、「まず、愛せよ」と教えています。大切なのは、イエスさまが私たちを愛されたように、私たちも愛することです。それが、イエスさまが私たちに与えられた「新しい掟」であり、また、そのように生きるのがイエスさまの弟子なのです。

3. まず、愛しましょう

伝道主日を迎え、どうすればこの世の人々に福音を伝えることができるのか悩みます。イエスさまはこう言われました。「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」（13：35）。これよりも確実な伝道はないのです。愛の模範を示されたイエスさまに従って、私たちも互いに愛することです。そうすれば、この世の人々は私たちがイエスの弟子であると思わせよう。イエスさまは私たちのロールモデル(role model)です。イエスさまの弟子は、イエスさまが模範を示し、また命じられた言葉通りに生きる人です。イエスさまが示された模範に「倣い、従う人」であり、イエスさまが教えられたとおりに「学び、訓練する人」であります。主イエス・キリストが示された愛をもってこの世の人々を愛する私たちでありますようにお祈りします。

各地方会牧師副会長／長老副会長の新年の願い

西南地方会副会長〈朴在徳 長老〉



2024年の1年を振り返ってみますと、神様からたくさんの恵みをいただきながらも、それを自覚することなく、傲慢になり、絶えず周囲に不平不満を吐露していた自分がいたことを悔い改めます。

2025年はどのような環境にあっても、神様からいただく恵みに対して、いつも感謝する

自分でありたいと思います。

西部地方会においては、2024年度に無牧教会等再建検討ワーキンググループを立ち上げましたが、一日も早く無牧教会に牧会者が立てられ、福音伝道の働きができますように願っております。また、未自立教会においても主の祝福のもと教会が益々復興成長し、自立できますようお祈りいたします。

総会に対しては、早急に総会財政の健全化が成し遂げられますように願います。各地方会を指導し、牽引する総会となりますようお祈りいたします。また、我が教団の母教会である東京教会が一日も早く葛藤を克服して、復興発展しますようお祈りいたします。(朴在徳長老は2024年に視務長老を引退しました。)

関西地方会

2025年新年査経会開催 具滋佑牧師講師に教役者セミナー

関西地方会伝道部主催の2025年新年査経会が、『心を新たに
して自分を変えていただきなさい』を主題に、1月12日(主)
と13日(月)の両日にわたって開催された。今回は、具滋佑牧
師(東京希望キリスト教会)を講師としてお招きした。

1日目の大阪地域は午後3時から大阪北部教会で行われ(75
名参加)、『心を新たにして自分を変えていただきなさい』(ロー
マ12:1～2)という主題で説教がなされた。

2日目は京都地域として午後6時から京都南部教会で行われ
(30名参加)、『神の武具を身に着けなさい』(エフェソ6:10～
20)という主題で説教がなされた。2日にかけての御言葉を通
して私たちは新年の心構えと霊的な戦いの中で勝利するために
新たな姿勢を持つことになった。

また、同日午後2時から京都南部教会において、具滋佑牧師
を講師として『Emerging時代と新たな牧会戦略』という主題で
教役者セミナーが開催された。特に、このセミナーを通してポ
ストコロナ時代に直面している多くの課題の前で、教役者たち
の牧会戦略を新たにすると同時に説教の大切さについて学ぶ良
い機会となった。
(報告:伝道部長 趙永哲牧師)



西部地方会

韓日交流信徒大会を開催 教団兵庫教区と共催で87名が参加

1月13日(成人の日)に在日大韓基督教会西部地方教会・日
本基督教団兵庫教区共催による第39回韓日交流信徒大会が在日
大韓基督教会神戸教会で開催された。この大会は、1984年に在
日大韓基督教会と日本基督教団との間に結ばれた宣教協約をふ
まえ、西部地方会と教団兵庫教区とが協約の実践をめざし、
1985年以来、毎年1月の成人の日で開催してきたものである。

この度の2025年は阪神淡路大震災30周年に当たり意味深い大
会となり、当日87名(西部地方会46名、兵庫教区41名)とい
うたくさんの参加者を得た。

開会礼拝は金武博(神戸教会)大会委員長の司会で進み、
「最後の勝利を確信しなさい」(ローマの信徒への手紙8章31
～34節)と題する韓世一牧師(神戸教会)の説教があり、同牧
師の祝辞で礼拝を終えた。席上献金は能登半島被害者救援(輪
島教会等)のためにさげられた。

新成人祝福式が寺崎真牧師(教団兵庫松本通教会)により恵
みのなかで行われ、3名の新成人が祝福された。その後阪神淡
路大震災30周年を経験した金登志子師母(神戸教会)と清水操(教
団神戸栄光教会)2名の証しがあった。

6分団に分かれ昼食を共にし、互いの交わりと信仰生活上の
諸問題に対して意見交換をした。2部の安らぎのひと時では、
シオン合唱団(団長:沈貞兪名誉勳士)の「み恵みによりて」
を初め4曲の素晴らしい合唱とソプラノ山本基子さんの独唱で
意義深く楽しいひとときで、信徒の感動を誘った。

韓日の信徒がコロナ禍での二年を除き40年の永きにわたり霊
的に交わられた恵みに感謝した。
(報告:神戸教会 金武博)



在日本韓国YMCA「2024クリ スマスフェスティバル」開催

2024年12月15日の午後、在日本韓国YMCAが主催する「2024
クリスマスフェスティバル」が、在日大韓基督教会関西地方会、
東京聖市化運動本部、韓国CBMC日本連合会が主管する中、関
東各教会や団体から約200名が集い行われた。

姜英珍牧師(東京第一教会)の司会で開会された礼拝には韓
国から李聖熙元老牧師(ソウル蓮洞教会)を迎えてクリスマスの
メッセージを聞いた。その後2部にプログラムが続き、讃美、
青少年奨学金伝達などが行われ、神には栄光を捧げ、私たちに
は平和と喜びのときであった。

福音新聞3月号休刊の お知らせ

都合により2025年3月号の福音新聞を休刊いたします。ご了承
下さい。

西南地方会

正初査経会及び都諸職会開催 朱文洪牧師を講師に迎え

1月12日(主)午後4時から午後8時まで小倉教会(オンライン併用)において正初査経会及び都諸職会が行われた。講師は朱文洪牧師(小倉教会)で、主題は「네 발의 신을 벗으라」「足から履物を脱ぎなさい」(出エジプト3:5)であった。西南地方会と小倉教会を借りて礼拝している「華人教会」を含め45名(オンライン6名含む)が参加し、賛美と御言葉、そして愛餐の時間を分かち合った。

朱文洪牧師は小倉教会に赴任して23年の間、教会と西南KCCの働きにおいて感じたことを、証しを交えて「私たちが在日大韓基督教会はこの日本において苦難の時を過ごしてきたが、日本の教会との関係を大切にそれを乗り越えてきた。これからその関係を大切にしてほしい。」と御言葉を取り次いだ。



朱文洪牧師は今年の3月に隠退する。その後、都諸職会が行われ、地方会長の辛治善牧師の司会のもと、各教会の現状報告と祈りの時間をもった。

(報告: 林明基牧師)

大阪北部教会

金榮植名誉牧師が召天 第40回期総会長を歴任、総会活動奉仕



2024年12月20日、大阪北部教会の金榮植名誉牧師が天に召され、趙永哲牧師の司式のもとで葬儀が行われた。享年93歳であった。

故・金榮植牧師は1931年韓国の慶北青松で生まれ、幼い時に両親と共に来日してから日本基督教団小松教会(石川県)の聴波克己牧師より受洗、日本聖書神学校を卒業し1963年に在日大韓基督教会第19回定期総会において牧師接手を受けた。

新義教会、水鳥教会、折尾教会の牧会を経て、1983年から2001年まで大阪北部教会に仕えた。牧会の際に3年間(1964年～1967年)ドイツのHeiderberg大学留学もした。

故人は在日大韓基督教会第40回期(1989年～1991)総会長を歴任し、総会のあらゆる活動のために生涯仕えた。

(報告: 申容燮)

外キ協第39回全国協議会 と全国集会開催

1月23日～24日、KCC会館で外キ協第39回全国協議会を開催した。主催は「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会(外キ協)」。日本の各教派・団体および各地外キ連、計44人が参加した(うちKCCJ参加者は8人)。

主題「在日コリアン・移民・難民と共に生きる教会」のもと、米澤澄子牧師(日本自由メソヂスト教団総会議長)の開会説教、秋葉正二さん(外キ協事務局)の基調報告、IKUNO・多文化ふらっと代表理事森本宮仁子さんの「民族保育とIKUNO・多文化ふらっとの活動」、ウトロ平和祈念館副館長金秀煥さんの「ウトロでおわらない、ウトロの話」、佐藤信行さんの「外登法・入管難民法に抗して39年」について発題がなされた。23日夜には名古屋学院大学李相勲さんの「在日大韓基督教会の宣教論と外キ協運動」というテーマで講演会もあった。24日には各外キ連と教派・団体の2025年計画と今後の中長期課題について発題の後、NCC総幹事大嶋果織さんの閉会お祈りで全てのプログラムが終わった。

24日夜には、大阪教会で第39回全国キリスト者集会を開催し、オンライン参加者を含めて約80人が参加した。前田万葉カトリック枢機卿のメッセージのあと、「地域から多民族・多文化共生の天幕をひろげよう」と題して、関西の五つの教派の代表者たちのパネルディスカッションがあった。

1980年代、KCCJの指紋拒否の闘いから生まれた外キ協は、日本の諸教会による画期的なエキュメニカル運動として39年間続けられてきた。外キ協は新たな課題に直面し、現在、第3期の構想を進めています。「歴史に向き合う移民社会」の実現という課題を、私たちの総会と日本国内すべての教会の宣教課題として認識し、取り組んでいくことを願っています。



仙台教会創立40周年を感謝 東北地方福音宣教の拠点として 馬栄烈牧師

主の大いなる恵みと愛により、仙台教会が創立40周年を迎えることができましたこと、心より感謝申し上げます。この40年間、神様は仙台教会を通して、日本東北地方で福音の光を照らし、キリストの愛を伝え、神の御国を建て上げる尊い働きを導いてくださいました。

仙台教会の歴史は、1908年に設立された日本初の在日大韓基督教会として、東北地方におけるマイノリティである在日同胞と日本人の救済を目指して、1984年12月2日、基督教大韓監理会から宣教師として派遣された金致福牧師と創立信徒たちの涙と祈りの中で始まりました。この福音を伝えた先祖たちの信仰と努力は、今日の仙台教会の揺るぎない土台を築き上げました。また、金致福牧師の引退後、続けて基督教大韓監理会から派遣された第2代の金根湜牧師、第3代の徐東一牧師、そして信徒たちの献身は、神様の真実を証するものとなりました。特に、教会堂建設や宣教師への支援などには富川第一監理教会からの支援が大きかったことと在日大韓基督教会と日本基督教団との宣教協力は仙台教会の設立と同時に始まり、現在も日本基督教団東北教区との連携を通して良い交わりと宣教協力を続けています。

現在、仙台教会は日本東北地方の福音化の中心的な教会として、教団の宣教精神を継承し、東北地方での伝道を行っています。また、

キリストの体なる教会として、ビジョンとリバイバルに満ちた教会として、地域社会に仕え、次世代を育成し、多文化共生の礼拝共同体としての役割を果たしています。仙台教会の中心的な価値観は、礼拝、弟子訓練、一対一の養育を通して、信徒たちの霊的成熟と使命実践を導くことです。そして「美しい教会、幸せな信徒」として、神の国の民として生きるための奉仕を続けています。

「あなたがたの労苦が主にあって無駄でないことを知っているからです。」(第一コリント15:58)この御言葉のように、仙台教会は過去、現在、そして未来を共に歩む希望の共同体、神の国の共同体、使命の共同体として歩んでいます。この歩みの上に神様の恵みと導きが豊かであることをお祈りいたします。

仙台教会が神の御国を築き上げる教会として成長し、新たなビジョンと情熱を持って、日本だけでなく全世界の国々に向けて福音を伝える使命を果たしていくことを願います。

全国教会の皆さま、そしてすべての同役者の祈りと愛に心より感謝申し上げます。今後とも仙台教会が主の体なる教会として用いられるよう、多くの関心と祈り、そして共に歩んでいたければ幸いです。



特別寄稿

1950年代のKCCJ大垣教会時代の追憶

朴 憲 郁 牧 師

いつの間にか年老いてまもなく満75歳になるKCCJ在日二世の引退牧師の私は、日本の敗戦後の混乱時代、KCCJ再建期に全国を駆け巡って奮闘した在日一世の父、朴命俊牧師の全盛期の1950年代を今振り返っている。7人兄弟姉妹の6番目の私と7番目の妹(昨年5月末に召天)の生地であった大垣教会時代のことである。当時日曜学校も青年会も活発で、そのメンバーの中からやがて4人もの牧師が輩出された。筆頭の私、次いで金性済、徐貞順、金健である。

私個人の牧会歴および職歴を前もって略記する。1976～2002年KCCJ伝道師/牧師、1983～1988年ドイツ・テュービンゲン大学神学部留学(神学博士)、1994～2018年東京神学大学神学教師(教授)、2018年4月～2025年3月同大学特任教授、2003～2018年日本キリスト教団千歳船橋教会兼務主任牧師、2020～2024年山梨英和学院院長、2021～2025年3月山梨英和大学学長。

父の名古屋教会赴任を契機に家族が大垣を離れて実に65年ぶりの昨秋10月下旬に、姉たちが懐かしい大垣教会を訪問した。とんがり帽子の赤い屋根が青い屋根に変わったこと以外には外形も教会堂の中も牧師館もあの当時のままであったが、蔡銀淑牧師が暖かく迎えてくださった。蔡牧師によるその歓迎記録を知った総会事務所の金柄鏡幹事の依頼を受けて、私が当時の追憶を掲載している。とは言っても、私には小学校4年生までの断片的な記憶しかないの、姉たちの思い出の記述を頼りに記している。

その頃の教会の敷地の周りは麦畑が広がっていた。秋には、オモニは小さい子供たちを乳母車に乗せ、大きい子供たちもみな連れ沿って行き、麦畑でイナゴ取りに放って遊ばせておきながら、一人で自由に大らかな声で讃美歌を心行くまで歌っていた。

教会の敷地内には、コスモスの花が雑草のように広がって咲き乱れていたこと、また、庭の一角には(十羽以上の)ニワトリを飼い、毎日のように卵を産んでくれたり、ヤギも一匹(その乳はミルク代わりに)飼ったりしていた。かわいいウサギも(このウサギの肉は食料にしたことはなかったが)たくさんにぎやかに育てていた。オモニは、こうして食糧難の時代に、知恵を働かせ、あれこれと面白く工夫をしていた。このようにゆったりとしたのどかな田舎の風景が周りにあった。夕方、遠く空を見上げると伊吹山がくっきりと見えていて、オモニは、この「伊吹山」をいつまでも懐かしんでいた。

姉たちが語るように、その頃、教会は大人の礼拝ばかりでなく、子供たちの日曜学校、青年会なども盛んで、なぜか心が燃えて皆で集まることがただ楽しかった。特に、クリスマスの頃には、飾りつけも行事もすべてにぎやかで、明るい心で祝ったその頃のことを懐かしい。教会の玄関先に「祝聖誕」と父が筆書きした看板を中心に立派に飾り付け、教会内もあれこれとツリーと装飾をし、心をはずませてその日を待った。教会堂の天井一杯に万国旗が飾られると心が暖まる気分であった。当日は子どもたちが歌や踊り、劇など準備して発表し、大変にぎやかで楽しくうれしかった当時の様子が脳裏に…。その他にも、車のない時代にクリスマスキャロルを回るのに各々自転車に乗って回り、最後に一執事の家で暖かいおしるこをご馳走になったこと、アメリカ、カナダから送られた古い衣服を教会員たちが喜んで分け合ったことなどが思い起こされた。つまり、一つの教会の共同体としての全盛期だったように思う。

ところが、(そんな全盛期の時代に)子供心にも「なぜ?」と不思議に思ったことがあった。ある日、どうしてか朝早く目が覚めた姉は、静かにそっとドアを開けて教会堂の中をのぞくと、誰か、聖壇の前で膝まずいて神と葛藤しているかのように祈っている人が一人! 良く見ると、それは父だったのだ!(ビックリして、静かにドアを閉めて消え去ったのだが…) そんな姿の父を目撃したことは、子供であった姉には衝撃的だった。「どうして? 教会で立派に説教をする牧師の父が、あんなに真剣に神に祈り対話することがあるのかしら?」と、本当に不思議に思え、その後、長い間、今日までその姿が姉たちの心に残っていた。

人生の夕暮れ時にしばしば思うのだが、あの時の祈る父の姿は「教会が人の目には順調に導かれ盛んでよく運営されていると見えても、その陰には、父は牧師であっても一人の人間としての苦しみ、痛み、弱さ、疑い、その他、経済的・人的な多くの問題を抱え、重荷を一人で背負いつつ、神の御前に「砕けた魂」を携え、神の許しと導きと、新たな励ましを本気で乞い求め、神と葛藤するかのようによく祈らなくてはならなかった」のではないかと。その祈りが、最後の日まで、力強く父の支えと導きとなり、生きる信仰と希望の力だったと、思いを馳せる。家庭礼拝も毎日欠かすことがなかった。

信仰一筋に、伝道一筋に、使命に生きた父は一日も欠かすことなく、まだ暗い早朝、その教会堂の中で熱心に祈りを捧げていたその姿。今もそのまま残っている牧師館には、よく体の不自由な人、目の見えない人も来ていっしょに食事をし、時には泊まってもいったもので、その方たちの姿も目に浮かんだ。明日の食べ物にも欠け、心配の連続の中でも、父と一緒に恵まれない人たちにも喜んで仕えた母も立派だと、幼いながらも感じていた。

懐かしい大垣教会が教会員は少なくなったにせよ、神の前に一つになり、牧師任を中心に輪になり今も続いていることに、感謝の思いが広がった。願わくば、神様の愛と祝福が豊かに注がれますように! 大垣教会だけではなく、在日大韓キリスト教会の行手に神の導きと恵みが豊かにありますようにと、心から祈りを捧げる。



<公告> 2025年 総会奨学生 募集案内

総会神学生として各地方会にて認定され、1年を経過した者が申請できます。書類は総会事務局にお問い合わせください。

- 募集人員: 3名 ○支給金額: 年額 200,000円 / 1人
- 支給期間: 1年間(受給者は、継続して新たな申請必要)
- 必要書類: ①奨学金申請書 ②在学証明書 ③成績証明書 ④履歴書 ⑤堂会長推薦書 ⑥総会神学生認定書(各地方会試取部) ⑦各地方会長承認書
- 締め切り: 2025年4月30日必着 ※書類提出先: 総会事務局